

急性胆嚢炎	3
ヘルニア	1
NHL	6
膵内脾	1
その他	20
PTCD/PTAD	24
<hr/>	
結腸, 直腸	268
原発	196
結腸悪性	127
右半結腸切除術	42
S状結腸切除術	39
右結腸切除術	16
左半結腸切除術	9
横行結腸切除術	5
結腸部分切除術	8
下行結腸切除術	2
回盲部切除術	1
上行結腸切除術	0
虫垂切除術	0
大腸亜全摘術	3
超低位前方切除術	1
非切除術	1
結腸良性	1
S状結腸切除術	1
直腸悪性	67
低位前方切除術	19
前方切除術	19
超低位前方切除術	19
直腸切断術	2
経肛門的切除術	6
ハルトマン手術	1
骨盤内臓全摘術	0
非切除術	1
直腸良性	1
腫瘍摘出術	1
再発	20
肝切除術	12
大動脈周囲リンパ節郭清術	1
低位前方切除術	1
直腸切断術	2
局所切除術	1
卵巣切除術	1
バイパス手術	1
人工肛門造設術	1
肝転移	16 (上記原発再発症例に含まれる)
異時	12 (上記再発症例に含まれる)
同時	4 (上記原発症例に含まれる)
その他の手術	52 (内緊急手術9)

他科癌・他癌	13
人工肛門造設術	4
S状結腸切除術	3
右半結腸切除術	2
骨盤内臓全摘術	1
ハルトマン術	1
バイパス手術	1
腹膜炎手術	1
人工肛門閉鎖術	20
人工肛門造設術	3
洗浄ドレナージ	
人工肛門造設術	3
肛門狭窄拡張術	3
腹壁癒痕ヘルニア	2
腸閉塞手術	2
膿瘍ドレナージ	2
虫垂切除術	1
洗浄ドレナージ	1
横隔膜ヘルニア修復術	1
虚血性腸炎	1
<hr/>	
乳癌	329
外来手術	
乳腺	62
入院手術	
乳腺	
良性	12
乳輪下膿瘍	1
乳癌	329
Auchincloss	38
Mastectomy + SLNB	23
Simple mastectomy	9
Lumpectomy + Ax	91
Lumpectomy + SLNB	125
Lumpectomy	43

2007年の外科手術件数は入院1,265件, 外来62件で2006年と比べ入院が44件増加し昨年に続き過去最高手術数を記録した。各臓器別手術件数は乳癌は329件であり, 一昨年は乳腺手術が減少したが昨年は32件増加した。消化器では食道37件, 胃393件, 肝胆膵164件 (PTCDを除く), 直腸・結腸268件で一昨年と大きな変化は見られなかった。癌の手術件数も一昨年と比較しても微増はしているものの大きな差はなかった。この2-3年は術式も一定しており, 消化器癌では拡大手術・縮小手術の割合も大きな変化はなかったが乳癌手術では78%が乳房温存手術であり温存率が増加していた。昨年はアバスタチンの保険適応やGemcitabineの術後補助療法としての有用性の報告などが見られ消化器癌においても術前・術

後補助化学療法の併用により手術成績の向上がますます期待されている。

(文責 土屋嘉昭)

2. 呼吸器外科

1. 気管（支）疾患	0
気管切開	0
2. 肺疾患	209
2-1 良性肺疾患	12 (3)
炎症性肺疾患	9 (3)
良性肺腫瘍	0
その他	3
2-2 悪性腫瘍	197
2-2-1 原発性肺癌	175 (38)
全摘除	3
肺葉切除	119 (33)
区域切除	27 (2)
部分切除	22 (3)
試験開胸	4
審査開胸	0
生検	0
2-2-2 転移性肺腫瘍	22 (8)
結腸直腸癌肺転移	9 (5)
骨軟部腫瘍肺転移	5 (2)
腎癌転移	1
頭頸部癌転移	2 (1)
他	5
3. 縦隔疾患	15
3-1 縦隔腫瘍	14 (6)
胸腺腫	6 (1)
奇形腫	0
胚細胞性腫瘍	0
神経性腫瘍	3 (3)
胸腺癌	0
胸腺カルシノイド	1
嚢腫	0
リンパ腫	2
他	2 (2)
3-2 縦隔鏡検査	1
4. 胸膜疾患	10 (3)
気胸	5 (3)
膿胸	0
胸膜生検	1
胸膜中皮腫	3
乳び胸	1
5. 胸壁疾患	2

() : 胸腔鏡手術

合計 236

2007年の手術数は236件で、昨年より少し減少した。原発性肺癌手術例は175例で、これも少し減少した。最近3年間に、肺癌手術の手術死亡はない。肺癌に対する胸腔鏡併用手術（VATS）はさらに増加しており、本年は肺葉切除のうちVATS併用下肺葉切除が27%を占めた。最近増加している2cm以下の小型肺癌には、根治を目指した区域切除などの縮小手術を行っている。転移性肺腫瘍や良性縦隔腫瘍でも、胸腔鏡手術は増加している。胸膜中皮腫の生検が3例あり、今後増加の可能性がある。

(文責 大和 靖)

3. 整形外科

腫瘍性疾患	
良性軟部腫瘍	
切除術	120
切除+植皮または皮弁	4
良性骨腫瘍	
切除	12
切除または搔爬+骨移植	13
小計	149
悪性軟部腫瘍	
広範切除	9
広範切除+筋皮弁, 遊離組織移植	2
切除・生検	7
計	18
悪性骨腫瘍	
広範切除	3
広範切除+人工関節等の再建術	3
切除・生検	2
計	8
脊髄腫瘍	2
転移性腫瘍・脊椎	
頸椎転移	2
胸椎転移	4
腰椎転移	1
脊椎生検	5
転移性腫瘍	
髓内釘・プレート固定	4
人工骨頭置換術	4
切除	3

転移性腫瘍	計	23
非腫瘍性疾患		
脊椎疾患		
頰椎後方拡大術・固定術		2
<hr/>		
脊椎疾患	計	2
<hr/>		
股関節疾患		
人工関節置換術		12
人工関節再置換術		6
人工骨頭置換術		1
臼蓋形成		1
滑膜切除		4
<hr/>		
股関節疾患	計	24
<hr/>		
膝関節疾患		
人工関節置換術 全置換		30
人工関節置換術 単顆置換		3
人工関節置換術 再置換		2
関節鏡視下滑膜切除		2
関節鏡視下半月版切除		1
関節鏡検査		2
骨長調整術		1
<hr/>		
膝関節疾患	計	41
<hr/>		
肩関節疾患		
関節鏡視下滑膜切除		2
人工肩関節置換術		1
<hr/>		
肩関節疾患	計	3
<hr/>		
肘・手関節疾患		
腱鞘切開		23
手根管開放術		6
滑膜切除		2
人工肘関節置換術		1
関節固定・形成術		1
神経剥離		1
<hr/>		
肘・手関節疾患	計	34
<hr/>		
足・足関節疾患		
爪形成		2
関節固定術		2
<hr/>		
足・足関節疾患	計	4

その他		
骨接合術		12
デブリードマン		5
抜釘・異物除去		12
<hr/>		
その他	計	29
<hr/>		
	総合計	337

合計に対する腫瘍性疾患の比率は59.3%で昨年よりやや増加した。腫瘍性疾患のうち良性腫瘍74.5%、悪性腫瘍13.0%、転移性腫瘍11.5%、脊髄腫瘍1%であった。人工関節手術数は昨年より増加した。
(文責 畠野宏史)

4. 脳神経外科

(1) 脳腫瘍		
脳腫瘍摘出術		27
シヤント		1
その他		9
(2) 脳血管障害		
血腫除去		0
減圧術		0
その他		0
(3) 頭部外傷		
血腫除去術		2
(4) その他		6
<hr/>		
	計	45

前年度より減少したが、ノバリスを中心とした定位放射線治療が86例に増加しており、手術適応に関して再検討を行っているところである。
(文責 吉田誠一)

5. 産婦人科

腹式子宮全摘出術 (+ 付属器摘出術など)		71
子宮筋腫		47
子宮腺筋症		9
子宮頸部異形成		2
子宮頸癌	0期	7
	I a 1期	1
子宮内膜異型増殖症		5
<hr/>		
膣式子宮全摘出術		0
<hr/>		
準広汎子宮全摘出術		2
子宮頸癌	I b 1期	2

広汎子宮全摘出術		17
子宮頸癌	I b 1期	11
	I b 2期	2
	II b 期	3
子宮体癌	I b 期	1
<hr/>		
子宮体癌手術		47
(原則的に子宮全摘出術 + 両側附属器摘出術 + 骨盤リンパ節郭清) (子宮肉腫を含む)		
子宮体癌	I a 期	4
	I b 期	30
	I c 期	8
	II a 期	1
	III a 期	3
	III c 期	1
<hr/>		
悪性卵巣腫瘍手術		39
(原則的に子宮全摘出術 + 両側附属器摘出術 + 骨盤リンパ節郭清 + 大網切除術) (卵管癌を含む)		
卵巣癌	I a 期	10
	I c 期	9
	II a 期	1
	II c 期	5
	III a 期	2
	III b 期	1
	III c 期	8
	IV 期	3
<hr/>		
SLO (Second Look Operation)		1
(Secondary Reductive Surgeryを含む)		
卵巣癌		1
<hr/>		
子宮頸部円錐切除術		108
子宮頸部異形成		49
子宮頸癌	0 期	50
	I a 1期	5
子宮頸癌疑い		4
<hr/>		
LEEP (Loop Electrocautery Excision Procedure)		23
子宮頸部異形成		23
<hr/>		
その他の悪性腫瘍手術		21
再発癌手術		12
試験開腹術		6
ドレナージ		3
<hr/>		
附属器摘出術		33
(附属器腫瘍摘出術を含む)		

子宮筋腫核出術		22
<hr/>		
子宮脱手術		3
腔式子宮全摘出術 + 腔壁形成術		2
Le Fort手術		1
<hr/>		
腹腔鏡下手術		46
良性卵巣腫瘍		40
乳癌術後 (両側卵巣摘出術)		3
悪性卵巣腫瘍		1
子宮筋腫		2
<hr/>		
経頸管的切除 (TCR)		9
子宮筋腫		4
子宮内膜ポリープ		4
子宮内膜増殖症		1
<hr/>		
子宮内容除去術		5
子宮体癌疑い		5
<hr/>		
その他		7
外陰良性腫瘍手術		2
バルトリン腺造袋術		1
腹腔内ポート設置		2
頸管拡張術		1
IUD 抜去		2
<hr/>		
計		454

2007年の総手術件数は454件であり、前年の519件に比べ若干減少した。2006年9月に産科診療が終了したため、帝王切開など産科手術がなくなり、がん専門病院らしい手術内容となっている。454件中、284件は悪性腫瘍または関連疾患の手術であり、全体の約2/3を占める。しかし、子宮筋腫など良性腫瘍の手術に対する住民のニーズも依然として高い。

子宮頸癌はがん検診により発見される初期癌が増加し、円錐切除術やLEEPなどの縮小手術が中心となっている。しかし、欧米諸国に比べ本邦におけるがん検診受診率は低く、未受診者から発見される進行癌もいまだ多い。子宮頸癌の原因となるヒトパピローマウイルスに対するワクチンが欧米では実用化されており、わが国に導入されると将来これらの手術件数が大幅に減少することが期待される。

(文責 笹川 基)

6. 泌尿器科

悪性腫瘍

1. 後腹膜・副腎	(0)
転移性副腎腫瘍	0

2. 腎細胞癌	(48)
根治的腎摘除術	33
腎癌腎部分切除 (鏡視補助)	15
3. 腎盂尿管癌	(24)
腎尿管全摘除	24
尿管部分切除	0
4. 膀胱癌	(263)
膀胱全摘+回腸導管	9
膀胱全摘+皮膚瘻	4
膀胱全摘+回腸膀胱	2
膀胱部分切除	3
尿路変更のみ (尿管皮膚瘻)	2
TURBT	243
5. 前立腺癌	(485)
前立腺生検	436
前立腺全摘除	19
TUR-CaP	3
両側精巣摘除	27
6. 精巣腫瘍	(21)
高位精巣摘除	19
後腹膜リンパ節郭清	2
7. 陰茎癌	(8)
陰茎全摘	0
陰茎部分切除 (陰茎癌2, 膀胱癌浸潤1, 黒色腫1)	5
ソケイリンパ節郭清	3
8. その他	1
小計	(850)

良性腫瘍

1. 副腎腫瘍	(0)
開腹副腎腫瘍摘除	0
腹腔鏡補助下副腎腫瘍摘除	0
2. 後腹膜	(3)
後腹膜腫瘍摘除・生検	3
3. TUR-P	10
4. その他 (尿道腫瘍, 精巣上体腫瘍)	2
小計	(15)

腫瘍以外の手術

1. 腎	(22)
経皮的腎	22
2. 尿管	(67)
尿管カテーテル法 (留置含む)	65
他科回腸導管造設	2
3. 膀胱	(4)
膀胱瘻造設	2
膀胱血腫除去	2
水圧拡張療法	0
4. 尿道	(8)
内尿道切開	8
5. 陰囊/精巣	(1)
陰囊水腫手術	1
6. その他	(3)
陰囊膿瘍1, 膀胱穿孔1, 術後出血1	3
小計	(105)
総計	975

2007年の手術は延べ934名, 975件の集計であった。2004年の908件を凌駕し, 近年最多の手術件数となった。個々の検討を行なうと, 腎癌手術は2006年に比し, 10例ほど増加し, 2005年と同等, TURBTは若干増加し, 243件となった。前立腺生検は436例と近年最も多い件数となった。この増加分が手術件数の増加につながった。今後は悪性腫瘍診療へのさらなる特化により, 手術件数も増加する可能性があると思われる。(文責 若月俊二)

7. 皮膚科

悪性腫瘍

悪性黒色腫	23
基底細胞癌	58
有棘細胞癌	27
ボーエン病	21
日光角化症	17
外陰パジェット病	4
皮膚付属器癌	8
悪性軟部腫瘍	5
悪性リンパ腫	22

転移性皮膚癌	16
小計	201
良性腫瘍・その他	
母斑細胞母斑	89
表皮嚢腫（粉瘤）	101
脂漏性角化症	40
脂肪腫	42
皮膚線維腫・軟線維腫	27
脂腺母斑・青色母斑	15
良性皮膚付属器腫瘍	21
血管腫	10
ケラトアカントーマ	9
石灰化上皮腫	24
化膿性肉芽腫	16
慢性膿皮症	2
神経線維腫	3
その他	79
小計	478

昨年より総件数は若干減少したが、悪性腫瘍の割合がやや増加している。各疾患別の構成は例年通りであった。（文責 竹之内辰也）

8. 眼科

水晶体再建術 1眼内レンズを挿入する場合	109
水晶体再建術 2眼内レンズを挿入しない場合	3
硝子体茎頭微鏡下離断術 1網膜付着組織を含むもの +水晶体再建術 1眼内レンズを挿入する場合	1
霰粒腫摘出術	4
眼瞼下垂症手術 1眼瞼挙筋前転法	2
翼状片手術	1
合計	120

2006年の水晶体再建術の件数は148件であったのに対し、2007年は113件と減少した。1~3月に西3病棟の工事のため手術が行われなかったことが原因と考えられた。難波克彦医師の退官により、緑内障手術が行われなくなった。外眼部手術は7件と例年並みであった。（文責 大矢佳美）

9. 耳鼻咽喉科

生検	
----	--

硬性鏡下喉頭下咽頭腫瘍生検	28
頸部腫瘍生検（リンパ節，甲状腺）	45
中咽頭腫瘍生検	1
翼口蓋窩腫瘍生検（小児）	2
小計	76
甲状腺・副甲状腺	
甲状腺良性腫瘍半切	12
甲状腺癌（半切，D1郭清）	33
甲状腺癌（半切，側頸部郭清，気管合併切除）	1
甲状腺癌（全摘）	7
副甲状腺良性腫瘍	5
小計	58
頸部	
頸部郭清術のみ （原発操作に付属する頸部郭清）	3 (45)
小計	3
気管・喉頭	
気管切開	14
気管皮膚瘻孔閉鎖	2
気管喉頭分離手術	1
喉頭垂直部分切除	3
喉頭全摘	8
小計	28
口腔	
口腔腫瘍切除	6
頬粘膜癌切除，分層植皮再建	1
舌部分切除	11
舌半切，前腕皮弁再建	1
舌亜全摘，腹直筋皮弁再建	2
小計	21
咽頭	
咽頭皮膚瘻孔作成	1
咽頭皮膚瘻孔閉鎖	2
喉頭温存下咽頭部分切除（空腸再建）	1
喉頭温存下咽頭部分切除（前腕皮弁再建）	1
喉頭下咽頭全摘（空腸再建）	1
小計	6
大唾液腺	

耳下腺良性腫瘍	2
耳下腺多形腺腫再発	1
耳下腺癌切除 (皮膚, 神経部分切除)	1
<hr/>	
小計	4
<hr/>	
その他	
<hr/>	
上顎部分切除	1
Delay DP皮弁作成	3
DP皮弁切断	1
頬部皮下腫瘍切除	1
術後出血止血	1
移植皮弁壊死の除去	1
<hr/>	
小計	8
<hr/>	
合計	204

手術総数はほぼ例年とおりであった。毎年、甲状腺手術は多いため待機期間の長さが問題であったが、昨年も概ね2~3ヶ月と改善しなかったのは残念である。反面、ちょっとした努力で他科(血液, 内分泌)からの生検依頼には少しは迅速に対応できるようになった。昨年から当科の特色である喉頭機能温存手術は、喉頭垂直部分切除が3人、喉頭温存下咽頭部分切除2人と従来の手術法では発声機能を失うはずであった5人の患者さんのQOLに貢献できた。県内の関連病院にも認知されてきているので今後は症例の増加が期待できる。

総 評

わずか2人のスタッフだが、ある程度のQualityとQuantityは維持できたと思われる1年間であった。ただし、全国トップレベルの頭頸部癌治療施設との差は歴然としているため更なる努力が必要と考える。

(文責 佐藤雄一郎)